TOP MUSEUM

東京都写真美術館ニュース
eyes105

新・晴れた日 篠山紀信
山城知佳子 リフレーミング

eyes TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
NEWS MAGAZINE / 2021 Vol.105

INTERVIEW

新・晴れた日　篠山紀信

A New Fine Day: Shinoyama Kishin

3F 2F 2021.5.18｜火｜– 8.15｜日｜

一九六〇年代から今日まで第一線で活躍を続ける写真家・篠山紀信。60年間にわたる活動の全容を一望する初の大回顧展「新・晴れた日　篠山紀信」の開催を直前に控えた篠山本人に、写真批評家・倉石信乃氏を聞き手に、本展への想い、写真家としてのターニングポイントについて伺いました。

〈晴れた日〉1974年［堀江謙一 潮岬沖240キロを航海中の「マーメイドIII」］東京都写真美術館蔵

表紙／〈晴れた日〉1974年 東京都写真美術館蔵

「新・晴れた日　篠山紀信」展は、東京都写真美術館で初めての、篠山さんのキャリアを概観する展覧会です。倉石さんから見て、今回の展覧会にどのような意義があると思いますか。

倉石 これまで篠山さんの展覧会があまり研究ベースでなされてこなかったことを考えると喜ぶべき企画ですね。しかし日本の写真研究・批評の中で篠山さんについての関心がなかったわけではなく、底流にはずっとあったと思います。現代美術の文脈の中でも、今回展示される〈家〉がヴェネチア・ビエンナーレで展示されたのが1976年。コミッショナーは中原佑介さんでした。また、なんといっても同じ76年に篠山さんが写真、中平（卓馬[※1]）さんが文章を担当した『決闘写真論[※2]』が「アサヒカメラ」に一年間連載されたことが大きい。中平さんは篠山さんの作品を同時代において従来の写真に対する批評性を持つ表現として位置づけました。そう考えると、今回のような篠山紀信展はもっと早く開かれるべきだったんじゃないかと思います。

篠山 僕の写真は美術館に向いてないんじゃないかと思ってたんですよ。向いていたらもっと前に頼みにきているはずですから。僕自身も美術館で展示をしたいとはそんなに思っていなかったですね。美術館の悪口を言うときによく「あんなところは作品の死体置き場だ」と言うでしょう。あんなところで展覧会をやったら終わりだよ、と。僕もそう思っていたところはありますね。

ところが、今回、学芸員の関（昭郎）さんがやってきて、〈晴れた日〉を中心に展覧会を開きたいと言う。じゃあ、やってみようかなと思ったんです。「篠山紀信展　写真力」をやっていたから、実は展覧会が面白いんだということもわかっていましたから。ただね、傲慢に聞こえるかもしれないけど、僕は東京都写真美術館で展覧会をやらなくても傷つかない。ポピュラーな写真家なんです（笑）。やるほうが危険なんですよ。

倉石 篠山紀信もやっぱり歴史的な存在になりたかったんだな、と言われるからですか（笑）。

篠山 それだけならいいですよ。やってみて「普通だね」となったら困るんです（笑）。やるからには来てくれた人に驚いてもらわないとね。

倉石 篠山さんのお仕事には、日本型のポップアートとして評価されるべきところがあると思います。この日本社会でポピュラーであることがどういう意味とインパクトを持つのかを、本人もまたその位置からいわば内側から身をもって表現されてきた。

日本の現代美術におけるポップアート的なものは80年代ぐらいまではたいてい、メジャーではない形でのアヴァンギャルドを志向するものでした。アンディ・ウォーホルのような、本人も扱う主題もともに「著名であること」を体現するアーティストはなかなかいなかった。その意味では篠山さんは数少ない先駆的存在だといえるでしょう。

そうした性格を最初にとりあげて言い当てていたのが多木浩二[※3]さんです。関さんも展覧会図録に寄せた文章の中で引用していますが、「篠山紀信の写真はいわば『晴れ』の写真である」（『「晴れた日」をめぐって』1974）と書いている。何を撮っても、晴れの日、晴れの舞台という言葉にふさわしい写真を撮る資質を篠山さんが備えているということでしょう。

また、篠山さんご自身は『決闘写真論』の中で「自分が生きている時代を眼球（めんたま）をあけて確実に全部撮っちゃうことしかできない」とおっしゃっていますが、欧米でも日本写真についての研究が進み、50年代、60年代に続き、いま、70年代の研究が盛んになりつつあります。その場合、より広い文化や風俗との関わりの中で語られなくてはならず、70年代における篠山さんの位置づけは重要になる。

今回展示される〈家〉もそうです。戦後、家族という制度が壊れていくのと同時に、伝統的な日本建築の姿形も物理的に壊れていった。その崩壊の過程に即応して表現されている部分もあるので、単に写真というジャンルの中での研究にはとどまらない。戦後社会の動向とリンクしているわけですから、周辺領域を巻き込んだかたちでの研究が必要になり、それを積み上げる展覧会が、今回をきっかけに開かれていってほしいですね。

常に綺麗にしてやろう

展覧会の中心にあるのが1975年刊行の写真集『晴れた日』です。1974年に「アサヒグラフ」に連載されたシリーズをもとにしたものです

1：中平卓馬（1938–2015）
写真家、写真評論家。写真集に『来たるべき言葉のために』、著書に映像評論集『なぜ、植物図鑑か』など。2003年に「中平卓馬展 原点復帰―横浜」展（横浜美術館）が開催された。

2：『決闘写真論』
1976年に1年間「アサヒカメラ」誌に連載し、77年に単行本として刊行。「家」「晴れた日」「旅」「誕生日」などのテーマに中平が文章、篠山が写真を寄せた。単行本には二人の対談を収録。

3：多木浩二（1928–2011）
評論家。写真のほか美術、建築について論じた。1968年には中平卓馬、高梨豊、岡田隆彦と写真同人誌「PROVOKE」を創刊（–1970）。著書に『眼の隠喩――視線の現象学』ほか。

が、倉石さんはどう捉えていますか。

倉石 中平さんが『決闘写真論』の中で『晴れた日』について、篠山さんに「あなたがものすごく健康的なこと、仕事を支えるエネルギーが大きいことに驚かされた」と語っているんですね。じゃあ、『晴れた日』は本当に健康的で明るい写真集なのか。私はそうじゃないと思います。とても暗い本です。篠山さんを語るうえで、健康、明るさ、表層的という言葉がよく使われるんですが、それらのタームだけで語っては篠山紀信という多面体を捉え損なうんじゃないか。あえて表層という言葉を排除して、篠山紀信の内面とか、プライベートな深層を作品に見出そうとしてみたらどうかと思うんです。

篠山 『晴れた日』は暗いですよ。僕が生まれたのはお寺。幼い頃に立派な本堂、庫裏があった記憶がうっすらとあるんですが、戦争で秩父に疎開して、帰ってきたときには空襲で焼けてしまっていた。かろうじて薬師堂と閻魔堂が残っていただけ。あたりは一面焼け野原です。焼け野原で貧乏。僕の子供の頃の思い出はそこから始まるんです。ひどい状況の記憶から始まっている。みんなが貧乏だった時代だから、自分だけがひどい生活を送っていたとは感じませんでしたけどね。

　でも、焼け野原で貧乏だったことの反動はあるんですよ。たとえば妻を撮るとしても、普通の写真家だったら、生活感のあるリビングで撮る感じじゃない？僕は、こんな女は現実にはいないよ、というくらい立派で派手派手しい感じに撮る。それが『決闘写真論』で撮った「妻」ですよ。それって暗さの裏返しですよね。

倉石 興味深いですね。『決闘写真論』に入っている篠山さんの「妻」という写真は、プライベートな印象を与えない。モデルをされていた前のパートナー、ジューン・アダムスさんを撮った写真ですが、プライベートを一切排除して、和服やドレスを着せてセットアップを施し、完璧な芸能写真として撮っている。あえて私的なものを排除することで、実はそれを暗示させ重視していることが逆説的に見えてくるという写真です。

篠山 あれははっきり言って嫌みですよね（笑）。妻を撮るならこういう写真がいいんだっていう。日常そのままなんてつまんないって。僕の写真、基本的にどの写真にもちょっと嫌みなところがありますね。

倉石 プライベートな、私性を強調した写真を揶揄していく。

篠山 そう。おちょくってやろうっていう。

倉石 篠山さんの場合は、ときには潔癖なまでにプライベートなところを隠すというか、棄てていますよね。

篠山 ときには、じゃなくて常にです。常に綺麗にしてやろうと思っています。綺麗にしてやれば読者が驚くだろう。泥くさくはできないですね。

倉石 でも、『決闘写真論』では、子供の頃の写真も載せてますよね。プライベートな面が珍しく出ています。

篠山 あれだって隠してるんですよ。子供の頃の写真って言ったって、誕生日に母親が写真館に連れて行って撮った写真です。うちでスナップしてる写真を出せばいいようなもんだけど、それをないことにして、写真館でよそいきの顔をした写真を載せた。本当は戦争で着るものもなかったし、ちゃんとした靴もなかった。中には写真館の受付に座っていた女の子の靴を借りて撮った写真もあるんですよ。だからあれもウソなんです（笑）。

　都会っ子は照れるんですよ、プライベートを出すのをね。「カメラ毎日[※4]」の編集長だった山岸章二に言われて、なるほどと思ったのは「お前は透明な海を知らない。太陽の光も知らない。南の島へ行って写真を撮ってこい。肌を焼かれてこい」。

〈少女たちのオキナワ〉1997年

倉石 それは面白い指摘ですね。

篠山 東京の子って、太陽の強い光って浴びたことがないんですよね。奄美に行ったらたった二日で熱くて熱くて、肌をやけどしたんです。なんなんだ、この光って。そのおかげで今回展示する〈誕生〉が撮れたんです。写真を通していろいろなことを知ったんですよ。それは面白いことですね。

倉石 もう少し引いた眼で見ると、70年代の篠山さんの重要な仕事の一つは雑誌の「GORO」であり、中でも1978年9月号に掲載された「さよならシンシア　南沙織」だと思うんです。70年代はとくに篠山さんのプライベートな行動履歴が、時代とリンクしているのではないかと思うからです。

「さよならシンシア」はいまのご夫人の南沙織さんを撮影した写真ですが、「返還」前の沖縄から日本にやってきてスターになった。72年に沖縄返還という大きな出来事があり、写真界でも沖縄が大きな関心事になっていましたが、返還後はその関心が急速に薄れていく。これは批評家の八角聡仁さんが指摘していることですが、篠山さんはその時期にも沖縄にこだわっていて、きわめてプライベートな理由ではじまった沖縄へのかかわりが、のちには今回展示される〈少女たちのオキナワ〉につながっていきます。

　〈少女たちのオキナワ〉が発表された97年は、95年に起きた米兵の少女への暴行事件の二年後です。90年代の沖縄はツーリズムが盛り上がる一方で、そうした暗い事件が影を落としていた。〈少女たちのオキナワ〉はそうしたオキナワと日本の複雑な関係の中で生まれてきているはずです。「時代を全部撮っちゃう」という篠山さんのお仕事に、実は篠山さんご自身のプライベートな歴史も刻印されていることは注目に値すると思います。

わからないけど面白い展覧会に

篠山 僕が今回のように60年間を網羅した展覧会をやるのは最初で最後だと思うんですよ。なにしろ学生時代のデモの写真から始まるんだから。

　学生時代を別にすれば僕にとって写真は仕事なんです。「時代を全部撮っちゃう」っていうのも、結局、そういう時代だったっていうことですよ。時代に合わなかったら写真なんかだめなんです。時代と合うととことん面白いことができる。

倉石 時代との関係で言えば篠山さんの〈家〉が生まれた背景も興味深い。日本の写真史で建築と写真が密接に結びついたのが1950年代でした。渡辺

4:「カメラ毎日」
1954年創刊。1960年代に、立木義浩、高梨豊、森山大道、篠山紀信ら当時の若手写真家を抜擢し新しい写真表現を開拓。写真作家を多数輩出した。1985年休刊。

義雄[※5]さんや石元泰博[※6]さんなどの写真家が、建築家と共働して伊勢神宮や桂離宮などを撮影し、日本の伝統を再発見していくという、サンフランシスコ体制下にふさわしい動きがありました。

結果的にそれに対するアンチテーゼとして60年代初めに東松照明[※7]さんが〈家〉という作品を発表し、多木浩二さんが高く評価した。そして多木さんの論考を付した篠山さんの写真集『家』は、東松さんの試みをある程度引き継ぎ、しかもより大がかりな作品へと発展したものだと言えます。また、多木さんとともに、東松さんの〈家〉から、篠山さんの〈家〉へという展開を理解していたのが建築家の磯崎新さんだった。ですから、篠山さんがその後、磯崎さんと『磯崎新+篠山紀信 建築行脚』というシリーズで一緒にお仕事をされていくのは必然ですし、文化史的な文脈でも評価されるべきだと思いますね。

篠山 今回の個展は70年代の〈晴れた日〉や〈家〉もあるし、バブル以降の東京の写真もある。時代がテーマだから幅広いんです。でも、「写真力」展みたいに有名人がたくさん出てくるわけじゃないから、もしかすると、よくわからない展覧会だね、ということになるかもしれない。でも、その難解さが面白い。時代時代に僕が抱く欲望が分からないと理解できない。そういう展覧会になるんじゃないかと思いますね。

（2021年4月 本稿構成・タカザワケンジ）

本インタビューは東京都写真美術館ホームページでノーカット版をご紹介しております。

5：渡辺義雄（1907-2000）
写真家。戦前・戦中に報道写真家として活動。戦後は建築写真に力を注いだ。写真集に『伊勢神宮』ほか。東京都写真美術館初代館長を務めた。

6：石元泰博（1921-2012）
写真家。シカゴのインスティテュート・オブ・デザインで写真を学ぶ。1950年代から日本に拠点を移し、建築、都市をテーマにした作品を発表。写真集に『桂離宮』『シカゴ、シカゴ』ほか。

7：東松照明（1930-2012）
写真家。戦後の日本をテーマに、在日米軍基地、長崎、沖縄などを精力的に撮影。対談に登場する〈家〉は農家を撮影したシリーズ。1960年に「フォトアート」に連載された。

新・晴れた日 篠山紀信

A New Fine Day: Shinoyama Kishin

3F 2F 2021.5.18｜火｜- 8.15｜日｜

写真は死んで行く時の記録。
嵐の日も雨の日も
僕が撮る写真は、いつも晴れた日。
篠山紀信

時代の熱量をとらえた写真によって、1960年代から活躍を続ける篠山紀信。数多くの雑誌の表紙やグラビアを手がけ、写真家として時代をつくり出してきました。1974年に『アサヒグラフ』誌で連載され、後に写真集にまとめられた『晴れた日』は、篠山紀信の特徴を凝縮した一冊で、「写真はうまれながらにして大衆性を背負っているメディア」と自身で語るように長嶋茂雄や輪島功一、オノ・ヨーコなど、誰もが知るアイコンをちりばめながら、広範に社会の動きを捉え、昭和という時代の尖鋭な批評となっています。「新・晴れた日」と題した本展は、この『晴れた日』の構造を使って、二部構成で60年間にわたる篠山紀信の116作品を展覧します。

第1部 ［主催］東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
［会場］東京都写真美術館 **3階展示室**

第2部 ［主催］公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
［会場］東京都写真美術館 **2階展示室**

［観覧料］一般1,200円（第1部もしくは第2部のみは700円）ほか 各種割引あり
本展はオンラインによる日時指定予約を推奨いたします。
詳しくは、当館ホームページをご確認ください。

第1部（3階展示室）

写真界で注目を集めた1960年代の初期から、『晴れた日』や1976年のヴェネチア・ビエンナーレでも出品された『家』ほか、その後の幅広い活躍の原点となる70年代までの主要作品を紹介します。

〈誕生〉1968年

〈家〉［蔵座敷の家 山形県山形市］1972年

第2部（2階展示室）

1980年代以降に写真集で発表された作品を中心に、バブル経済による変貌から、2011年の東日本大震災を経て、東京オリンピックに向かい再構築される東京の姿まで、創造と破壊、欲望と不安が相即不離な変化の時代をとらえた作品を紹介します。

左）〈TOKYO NUDE〉［表参道・結晶のいろ］1986-92年
右）〈THE LAST SHOW〉2010年 製作 松竹（株）

〈ATOKATA〉2011年

篠山紀信
Shinoyama Kishin

1940年東京生まれ。日本大学藝術学部写真学科在学中の61年に広告写真家協会展APA賞受賞。広告制作会社「ライトパブリシティ」を経て、68年よりフリー写真家として活動開始。66年東京国立近代美術館「現代写真の10人」展に最年少で参加。76年にはヴェネチア・ビエンナーレ日本館の代表作家に選ばれるなど、その表現は早くから評価を受ける一方で、1971年より『明星』の表紙を担当して以降、写真家として時代を牽引する存在となる。70年日本写真協会年度賞、72年芸術選奨文部大臣新人賞、73年講談社出版文化賞、79年毎日芸術賞、98年国際写真フェスティバル金賞、2020年菊池寛賞など受賞歴多数。

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

山城知佳子　リフレーミング

YAMASHIRO CHIKAKO: Reframing the land/mind/body-scape

B1F 2021.8.17｜火｜－10.10｜日｜

《リフレーミング》2021年（新作）

映像・写真を主たるメディアとして、2000年代から精力的に作家活動を進めてきた山城知佳子（1976年沖縄県那覇市生まれ／在住）は、生まれ育った沖縄の歴史や地政学的状況と自身との関係に向き合うことを通じて、見過ごされ聞き過ごされてきた声や肉体、魂を伝える作品を手掛け、国内外で高く評価されてきました。

山城が生み出す映像は、見る者の身体感覚に訴えかけるイメージの豊饒さと詩性、そして同時代を見つめる批評的な視点を絶妙なバランスであわせ持つがゆえに、沖縄という特定の地域の問題に留まらず、より広い文脈での読み込みや解釈に開かれています。

公立美術館初個展となる本展では、初公開となる山城の最新作《リフレーミング》を、収蔵作品を中心とした過去の代表作と組み合わせて紹介します。単に時系列に沿って作品の変遷をたどるのではなく、新旧の作品を有機的に配置することで、相互に共鳴する主題やモチーフの連なりを、展示室内を回遊しながら体感できる構成となります。

最新作のタイトルでもある「リフレーミング」とは、ものごとを見ている枠組みを変え、別の枠組みで見直すことを指しており、写真・映像によって故郷沖縄の風景を新たな視点でとらえなおし見つめていくという、山城作品に通底する姿勢を象徴します。本展は、国際的にもさらなる飛躍が期待される映像アーティスト・山城知佳子のミッドキャリア個展として、その作品世界を総覧するはじめての本格的な機会となります。

[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／日本経済新聞社　[助成] 公益財団法人花王芸術・科学財団
[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
本展はオンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは、当館ホームページをご確認ください。

起点―そこにある風景

沖縄の海や山、そこに営まれる生活、死者と生者が交感する場の象徴としての墓庭、そして眼前に連なるフェンス。《BORDER》は、故郷である土地の歴史と現実を、そこにある風景として見つめた山城の原点ともいえる短編映像作品です。過去と繋がる回路をも断ち切って引かれたボーダー線の抗いがたい力と、そこにある現実を見据える山城の決意とがストレートに提示されています。

《BORDER》2002年 シングルチャンネル・ヴィデオ 東京都写真美術館蔵

私というメディア

山城知佳子の初期作品には、作家自身の姿がたびたび現れます。ヴィデオや写真は、作家が自らの身体をもって主題を受け止め、理解し、そして見る者へと投げかけるパフォーマンスの舞台となりました。同時に、山城の行為を介して、その背景にある場所自体の存在が強調され、見る者に語りかけ始めます。

2007年以降、「戦争体験」の継承をテーマに取り組んだ山城は、「声」や「語り」を通した継承のありかたについて、さまざまに考察を重ねました。《あなたの声は私の喉を通った》では、絞り出すように自身の痛切な戦争体験を伝える他者の語りを、繰り返し自らの声でなぞることを通じて、いかに他者の経験を理解し体感することが可能か、あるいはそれがいかに困難か、を顕わにしました。

1

2

3

1)《オキナワTOURIST I like Okinawa Sweet》2004年 シングルチャンネル・ヴィデオ 作家蔵　2)《OKINAWA墓庭クラブ》2004年 シングルチャンネル・ヴィデオ 東京都写真美術館蔵　3)《あなたの声は私の喉を通った》2009年 シングルチャンネル・ヴィデオ 東京都写真美術館蔵

図版はすべて© Chikako Yamashiro　Courtesy of Yumiko Chiba Associates

═ 擬人化された風景

山城の描き出すイメージは、風景を擬人化することで、しばしば寓話的な趣をとります。山城の空想が生み出した架空の存在をモチーフとした《アーサ女》では、波間に浮かぶ海藻のように浮き沈みしながら漂うカメラから海岸線をとらえることによって、人でないものが、分断に揺れる岸辺を見つめているという構図が生み出されています。

2010年に東京都写真美術館の新進作家展で発表した写真シリーズ〈コロスの唄〉には、世代の異なる人々の姿が、コントラストの強い木漏れ日のもとで輪郭を失い風景とひとつに溶け合うさまが映し出されています。山城は、地面に堆積した声なき者の思いや記憶と、不可能を前提にそれを継承しようと試みる生者の想いの響きあいを、「唄」になぞらえ視覚化することを試みました。

13点から成る写真シリーズ〈黙認のからだ〉では、洞窟の奥底で長い時を経てかたちづくられた鍾乳石のイメージが、被写体の動きにより輪郭がぶれてぼやけた人体像と並置されることで、あたかも人体（あるいは異形の生きもの）の部位であるかのように提示されています。

═ 土の連なり、穴という回路

《創造の発端—アブダクション／子供— 'A Piece of Cave 1-16'》は、2015年制作の短編映像作品から派生して作られ、2016年に発表されたインスタレーション作品です。ダンサーの川口隆夫が、泥と一体化しながら洞窟の闇の中を滑るように舞い踊るシークエンスを16台のモニターで構成。地底に張り巡らされた洞窟を縦横に巡るその姿は、大地に沈殿した記憶や痛みの回路を繋ぐ、地底の精霊のようです。

沖縄だけでなく、韓国の済州島でも撮影をした《土の人》は、山城が沖縄という土地と向かい合うことで見出し、長年にわたり格闘してきた「記憶／声の継承」という主題について、さらに普遍的なものへと見事に昇華させた集大成ともいえる作品です。現地に取材し、それぞれの土地に固有の複雑な歴史を背景としてふまえつつ、全体を「土」というモチーフによる寓話として紡ぐことで、文字通り地続きのものとしています。

「翼があるぞ」
「おどろいたか」、と老人が言った。
「ここのみんなが翼をもっている、だが役に立たないからもぎとれるものなら、そうしたかった」
「なぜ飛んでいかなかったんだ？」とたずねると。
「自分の街から飛んで行かなければいけないのか？
ふるさとをすてて。死んだものたちや神々も？」

高橋悠治「カフカノート」より（《土の人》展示会場配布リーフレット掲載のテキスト、一部抜粋）

左）《アーサ女》2008年 シングルチャンネル・ヴィデオ 作家蔵
右）《コロスの唄》2010年 発色現像方式印画 東京都写真美術館蔵

《黙認のからだ No.1》《黙認のからだ No.2》《黙認のからだ No.3》
2012年 発色現像方式印画 東京都写真美術館蔵

地の底から「プシュプシューッ」と吹き出る彼らの呼吸音を探していた。
海底から地底までの上昇中、声が小さな無数の気泡となって、ようやく地面に辿り着き、弾けた。無数の穴から吹き出している。
あちこちに潜んでいる者たちに輪郭が届けられる。彼らはまだ森の中に、
漂いの中に生きている。彼らの声を聴く。
他者の記憶が生暖かい息を残し語り続けている
地響きのような残響を、唄を、聴こえてくる声を聴く。

—— 山城知佳子

《土の人》2016年 3チャンネル・ヴィデオ・インスタレーション
東京都写真美術館蔵

図版はすべて
© Chikako Yamashiro Courtesy of Yumiko Chiba Associates

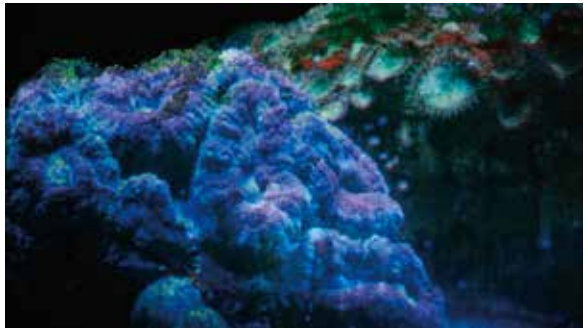
═ 最新作《リフレーミング》

《土の人》で、「記憶／声の継承」という主題に一区切りをつけた山城は、より俯瞰的な視点で沖縄の風景を見つめるとともに、沖縄の近現代史のなかで見過ごされてきた事象のなかにフィクションの可能性を見出し、新たなリサーチに取り組んできました。最新作《リフレーミング》では、カルスト地形で知られる名護市安和を舞台に、沖縄の海と山とをつなぐ寓話を創作。過去と現在、地上と地下、山と海、人と人でないものとを切り結び、現代の風景に重ね合わせる物語を紡ぎだします。

私は海のなかにいた。私のなかで抱かれる魚たちが、カチカチカチと話している。
カメが空を飛ぶようにちかづいて、かたわらに寄り添っている。私たちはやわらかく、波間にそよぐ私のからだは全体で、そして大きな丘だった。私は私のたくさんの、たくさんの私たちが笑っていた。

あるとき私は時間をかけて移動していた。そうしたかった。胸の中が熱くなって、私は私をかき集めた。そうして海から顔を出した。とけてうねってからだじゅうを鳴らして、大きく大きく顔を出した、ドドドドド。
かたわらに月がいるようになった。カメとは会えずにいたけれどさびしくない。私は大きな山になった。

カチンカランコロコロキン。私を追いかけてサンゴが浜に転がる。折れたサンゴはさまよった。サンゴは山になった私を追いかけてきた。



《リフレーミング》2021年（新作）

《リフレーミング》2021年（新作）

カランカランゴロゴロドン。山はうるさくなった。私のまわりには折れたサンゴが集まってきていた。忘れている。私があなただったこと あなたが私だったこと。私とあなたはまた海に戻りたい。

（山城知佳子《リフレーミング》制作ノートより）

《リフレーミング》2021年（新作）

《リフレーミング》2021年（新作）

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

第45回 2020 JPS展　第46回 2021 JPS展

2020 the 45th Exhibitions of the JPS　2021 the 46th Exhibitions of the JPS

B1F 2021.6.1｜火｜–6.6｜日｜

公益社団法人日本写真家協会が主催するJPS展は1976年に第1回展を開催し、今年で46回目を数えます。歴代の入賞・入選者からは多くのプロ写真家を輩出し、写真愛好家からの人気と評価の高い歴史ある一般公募展です。第45回 2020JPS展と第46回 2021JPS展を同時開催いたします。

〈お問い合わせ〉
JPS展事務局 03-3265-7453
〈公式サイト〉www.jps.gr.jp/jpsten/

第46回2021 JPS展 文部科学大臣賞
後藤芙美子《大河を渡る》カラー4枚組

[主催] 公益社団法人日本写真家協会
[共催] 公益財団法人東京都歴史文化財団
東京都写真美術館
[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり

世界報道写真展2021

World Press Photo 2021

B1F 2021.6.12｜土｜–8.9｜月・休｜

世界報道写真コンテストの受賞作を紹介する「世界報道写真展2021」は世界中の50か国、約120会場で開催される世界最大級の報道写真展です。64回目を迎える今回のコンテストには、130の国と地域から、4,315人のフォトグラファーが参加し、74,470点の応募があり、「現代社会の問題」、「一般ニュース」、「環境」、「自然」、「長期取材」、「スポーツ」、「スポットニュース」、そして「ポートレート」の全8部門において、28ヶ国45人の受賞が決まりました。本展では、受賞作約150点を展示いたします。

「一般ニュースの部　単写真」
2021世界報道写真大賞　候補作品
マッズ・ニッセン　デンマーク、
ポリティケン／パノス・ピクチャーズ
初めての抱擁
ブラジルのサンパウロにあるヴィヴァ・ベム介護施設で2020年8月5日、看護師のアドリアナ・シルヴァ・ダ・コスタ・ソウザに抱きしめられるローザ・ルジア・ルナルディ(85)

〈公式サイト〉www.asahi.com/event/wpph/

[主催] 世界報道写真財団／朝日新聞社
[共催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
[観覧料] 一般1,000円 ほか 各種割引あり

1F HALL 上映

最新の
上映スケジュールは
こちら▼

1F 地球交響曲第九番

この宇宙に普く満ちている音は森羅万象の創造に深く関わっている

『地球交響曲（ガイアシンフォニー）』は、イギリスの生物物理学者ジェームズ・ラブロック博士の唱えるガイア理論、「地球はそれ自体がひとつの生命体である」という考え方に勇気づけられ、龍村仁監督によって制作されたオムニバスのドキュメンタリー映画シリーズで、美しい映像と音楽、珠玉のことばの数々によって織り成されています。

『地球交響曲第九番』では、指揮者・小林研一郎が率いる「コバケンとその仲間たちオーケストラ」と、この映画のために結成された「ガイアシンフォニー第九合唱団」が出演する「第九」の演奏会に向け、小林が気迫と情熱で仕上げていくリハーサルのプロセスを描いています。14分に編集された「第九」の感動と昂揚は、『地球交響曲』の最終章『第九番』を飾る餞となりました。

[監督] 龍村仁 [出演] 小林研一郎／スティーブン・ミズン／本庶佑ほか [2021年／日本／123分]

[上映期間] 2021.6.22(火)–7.11(日)
[休映日] 2021.6.28(月)、7.5(月)
[料金] 当日券：一般・シニア1,800円、学生1,500円、中学生以下・障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2名まで)1,000円 各種割引あり

〈お問い合わせ〉龍村仁事務所
TEL.03-5368-5480
〈公式サイト〉http://gaiasymphony.com

©龍村仁事務所

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、
次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

《特別賛助会員》
キヤノン(株)
(株)資生堂
全日本空輸(株)
(株)ニコン

《賛助会員》
キヤノンマーケティングジャパン(株)
ゲッティイメージズジャパン(株)
大日本印刷(株)
東急建設(株)
凸版印刷(株)
富士フイルム(株)

《特別支援会員》
アサヒグループホールディングス(株)
サッポロ不動産開発(株)
サッポロホールディングス(株)
リコーイメージング(株)

《支援会員》
(株)アール&キャリア
(株)I&S BBDO
あいおいニッセイ同和損害保険(株)
アオイネオン(株)
(株)浅沼商会
旭化成(株)
(株)朝日工業社
朝日新聞社
(株)朝日新聞出版
朝日生命保険(相)
(有)アスペン/POLARIS
(株)アマナ
(株)岩波書店
(株)潮出版社
(株)栄光社
(株)エージーピー
(株)ADKクリエイティブ・ワン
SMBC日興証券(株)
NHK営業サービス(株)
(株)NHKエデュケーショナル
(株)NHKエンタープライズ
(株)NHK出版
(株)NHKテクノロジーズ
(株)NHKビジネスクリエイト
エルメス財団
OMデジタルソリューションズ(株)
(株)オンワードホールディングス
カールツァイス(株)
花王(株)
鹿島建設(株)
(株)KADOKAWA
カトーレック(株)
神奈川新聞社
カメラショップ(株)
(株)カメラの三和
(株)かんぽ生命保険
(株)キクチ科学研究所
(株)キタムラ
キッコーマン(株)
(株)紀伊國屋書店
ギャラリー小柳
共同印刷(株)
(一社)共同通信社
空港施設(株)
(株)久米設計
グローリー(株)
(株)ケー・アンド・エル
興亜硝子(株)
(株)弘亜社
(株)公栄社
(株)廣済堂
(株)講談社
(株)光文社
(株)国書刊行会
(株)コスモスインターナショナル
小山登美夫ギャラリー(株)
佐川印刷(株)
三愛石油(株)
三機工業(株)
産経新聞社
サントリーホールディングス(株)
(株)サンライズ
(株)ジェイアール東日本企画
JSR(株)
JXTGホールディングス(株)
(株)JTB
(株)シグマ
(株)実業之日本社
信濃毎日新聞社
清水建設(株)
(株)写真弘社
写真の学校/東京写真学園
シャネル(同)
(株)集英社
シュッピン(株)
(株)小学館
松竹(株)
信越化学工業(株)
(株)新潮社
(株)スタジオアリス
(株)スタジオエムジー
(株)スタジオジブリ
(株)SUBARU
住友生命保険(相)
(株)住友倉庫
(株)生活の友社
セイコーホールディングス(株)
双日(株)
ソニーグループ(株)
損害保険ジャパン(株)
第一生命保険(株)
第一法規(株)
(株)ダイケンビルサービス
台新國際商業銀行
大成建設(株)
(株)大丸松坂屋百貨店
大和証券(株)
(有)タカ・イシイギャラリー
(株)髙島屋
(株)宝島社
(株)竹中工務店
(株)タニタ
(株)タムロン
(株)丹青社
(株)中央公論新社
中外製薬(株)
(株)TBSテレビ
デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム(株)
(株)テレビ朝日
(株)テレビ東京
電源開発(株)
(株)電通
東亜建設工業(株)
東映(株)
東急(株)
(株)東京印書館
東京空港交通(株)
東京工科大学/日本工学院
東京工芸大学
東京新聞・中日新聞社
(株)東京スタデオ
東京造形大学
東京綜合写真専門学校
東京建物(株)
東京地下鉄(株)
東京テアトル(株)
東京都競馬(株)
(株)東京ドーム
(株)東京ニュース通信社
(学)専門学校 東京ビジュアルアーツ
(株)東京美術倶楽部
東京メトロポリタンテレビジョン(株)
(株)東芝
東宝(株)
(株)東北新社
(株)東洋経済新報社
(株)徳間書店
戸田建設(株)
(株)トロンマネージメント
(株)Nana
(株)ニコンイメージングジャパン
日油(株)
日活(株)
(株)日経BP
日光ケミカルズ(株)
(株)日本カメラ社
日本空港ビルデング(株)
日本経済新聞社
日本航空電子工業(株)
(株)日本廣告社
(公社)日本広告写真家協会
日本写真印刷コミュニケーションズ(株)
(公社)日本写真家協会
(公社)日本写真協会
日本写真芸術専門学校
(一社)日本写真文化協会
日本生命保険(相)
日本大学芸術学部
(株)日本デザインセンター
(株)ニッポン放送
日本レコードマネジメント(株)
日本ロレックス(株)
(株)ニューアートディフュージョン
野村證券(株)
(株)博報堂
(株)博報堂DYメディアパートナーズ
(株)博報堂プロダクツ
(株)ハースト婦人画報社
(株)ハーツ
パナソニック(株)
(株)パラゴン
ぴあ(株)
北海道 写真の町東川町
ピクトリコ
(株)美術出版社
(株)ビックカメラ
(株)ピラミッドフィルム
(株)ファーストリテイリング
(株)フェドラ
(株)フジテレビジョン
(株)フジヤカメラ店
(株)プリンスホテル
(株)フレームマン
プロフォト(株)
(株)文化工房
(株)文藝春秋
北海道新聞社
(株)ホテルオークラ東京
本田技研工業(株)
毎日新聞社
(株)マガジンハウス
丸善(株)
マルミ光機(株)
(株)マンダム
(株)みずほ銀行
三井住友海上火災保険(株)
三井倉庫ホールディングス(株)
三井不動産(株)
三菱地所(株)
三菱製紙(株)
三菱倉庫(株)
三菱UFJ信託銀行(株)
(株)ミルボン
武蔵大学
明治安田生命保険(相)
森ビル(株)
ヤマト運輸(株)
(株)吉野工業所
(株)ヨドバシカメラ
読売新聞社
ライオン(株)
ライカカメラジャパン(株)
(株)良品計画
(株)ロボット
(株)ワコウ・ワークス・オブ・アート
(株)ワコール
(他2社)

(株)=株式会社、(相)=相互会社、(有)=有限会社、(学)=学校法人、(公社)=公益社団法人、(同)=合同会社、(一社)=一般社団法人

(令和3年4月末日時点・五十音順)

2F SHOP
ミュージアム・ショップ

NADiff BAITEN

展覧会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・ショップ。5月18日(火)から開催の「新・晴れた日 篠山紀信」展では、トートバッグやキーホルダー、ポストカードなど、展覧会にあわせたオリジナルグッズを販売いたします。
ほかにも、国内外のさまざまな写真集や展覧会関連書籍、アート関連グッズなど、写真をより楽しむことができる商品を取りそろえ、世代を問わず人気のトイカメラも販売しています。フィルムの良さを気軽に楽しめるインスタントカメラで、デジタルとはまた違った写真を楽しんでみてはいかがでしょうか。

TOY camera DSC Pieni(全4色)	¥3,828(税込)
TOY camera PIENIFLEX	¥6,578(税込)
モノクロカメラ	¥9,878(税込)
Simple Use Camera(カラー/モノクロ)	¥2,119(税込)〜

詳細ページはこちら▶

[営業時間] 10:00-18:00 [TEL] 03-6447-7684
[定 休 日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

1F CAFE

1階カフェは、新店舗営業準備のため、4月1日(木)から休止しております(令和3年5月18日現在)。再開の日程が決まりましたら、当館ホームページにてお知らせいたします。

SCHEDULE / スケジュール

展覧会・イベント・上映の最新情報は、
topmuseum.jpまたはこちらへ ▶

	3F	2F	B1F	1F
2021 5	新・晴れた日 篠山紀信 (収)(企) 5.18(火)–8.15(日)			地球交響曲第九番 6.22(火)–7.11(日)
6			第45回 2020 JPS展 第46回 2021 JPS展 6.1(火)–6.6(日)	
7			世界報道写真展2021 6.12(土)–8.9(月・休)	
8	リバーシブルな未来 (企) 8.24(火)–10.31(日)	宮崎学 (企) 8.24(火)–10.31(日)	山城知佳子 リフレーミング (収) 8.17(火)–10.10(日)	
9				
10			写真新世紀展2021 10.16(土)–11.14(日)	
11				
12	日本の新進作家 vol.18 (企) 11.6(土)–2022.1.23(日)	松江泰治 (収) 11.9(火)–2022.1.23(日)	Prix Pictet(プリピクテ) 11.20(土)–2022.1.23(日)	
2022 1				
2	第14回恵比寿映像祭 2.4(金)–2.20(日)			
3	写真発祥地の原風景 はこだて (収) 3.2(水)–5.8(日)	TOPコレクション 光のメディア (収) 3.2(水)–5.8(日)	APAアワード2022 2.26(土)–3.13(日) 本城直季展 3.19(土)–5.15(日)	

(収) 収蔵展
(企) 企画展

東京都写真美術館　年間パスポート「TOPMUSEUM PASSPORT 2021」発売中

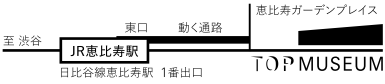
展覧会を無料または割引でご鑑賞いただけるお得なパスポートです。

販売期間：2021年9月30日(木)まで　有効期間：購入日 ～ 2022年3月31日(木)
販売価格：3,300円(税込)　販売場所：1階 総合受付

年間パスポートの
詳細はこちら ▶

スケジュール内の(収)は無料、(企)は4回まで無料、その他は割引料金となります。特典の詳細は、当館ホームページのご利用案内からご確認ください。

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場を御利用ください。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099　topmuseum.jp

開館時間　10:00–18:00 ※入館は閉館30分前まで。
休 館 日　毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)

東京都写真美術館ニュース「アイズ2021」105号 □発行日：2021年5月18日／企画・編集：東京都写真美術館管理課企画広報係 □印刷・製本：株式会社公栄社 □発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館©2021 □本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。事業内容は諸般の事情により変更することがございます。最新の情報はホームページをご覧ください。

THE FUTURE IS ART
Tokyo Tokyo FESTIVAL